近世中期の伊勢神宮における殿舎の考証とその意義

ON THE HISTORICAL STUDIES AND ITS MEANINGS OF THE BUILDINGS OF ISE-JINGU IN THE MIDDLE OF EARLY MODERN PERIOD

加藤 悠希*

Yuki KATO

This paper examines the characteristics and functions of historical studies on the buildings of Ise-Jingū in the middle of early modern period.

Historical studies have been written down since around Kanbun era (1661-1673). In early times, their subjects are limited to the buildings whose reconstruction projects were planned, but soon studies which cover all buildings of Ise-Jingū were compiled.

Around that time, there were dispute between Naikū (Inner Shrine of Ise-Jingū) and Gekū (Outer Shrine of Ise-Jingū) about the revival projects of Gekū, and historical studies which were solely compiled by the priests of Gekū until the early eighteenth century include their claim.

Keywords: Ise-Jingū, early modern period, historical study, reconstruction, revival

伊勢神宮, 近世, 考証, 再興, 復古

1. はじめに

伊勢神宮の殿舎の古制を明らかにしようとする試みは、近世以来伊勢神宮の祠官らによって行われてきた¹⁾。近世に作成された考証の内容については福山敏男による『神宮建築に関する史的調査』²⁾において触れられているが、その関心は考証内容の正誤の指摘にあって、それらの性格や、作成された背景などに関しては考察が行われていない。

それでは近世に作成された、伊勢神宮の殿舎の古制に関する考証とはどのような性格のものであったのか。筆者は先に、近世における考証の最初期の例として挙げられる『太神宮造制或問』（寛文7年（1667）成立）について、それ以前に比べて儀式帳の参照姿勢が変化し、その不審な点を内密にするのではなく、熟読詳味することによって古制を明らかにすることができると主張したことで、古制の考証が記録として残されるようになる一つの画期となったこと³⁾、そして、その考証は寛文9年（1669）の式年遷宮に際して両宮の玉垣を再興するにあたっての初期計画案として位置づけられることを指摘した⁴⁾。本稿ではそれに続く時期、主に17世紀後半から18世紀初頭に行われた、伊勢神宮の殿舎の古制に関する考証について、主に殿舎の再興・復古との関わりと知識の流布という二つの側面に着目して考察を行いたい。

以下では、二節で具体的な事例について検討し、三節でそれらが

当時において担った意義やその背景について、同時代的な殿舎の再興・復古の実態と併せつつ検討していく。

2. 成果物としての考証へ

『直会院勘文』

『太神宮造制或問』は、外宮の神官であり学者でもある中西信慶と、大宮司河辺精長の長男である河辺故長、大宮司家政所の小田成近の三人によって作成されたものであり、寛文7年（1667）に大宮司河辺精長が願い出て寛文度の式年遷宮の際に再興された両宮の玉垣の再興計画に関連したものであった。近世の考証において、このように実際の殿舎の再興が具体性を帯びた目的としてあったものはそれほど多くないが、同様の性質のものとしては『直会院勘文』（天和2年（1682）序）⁵⁾が挙げられる。

『直会院勘文』は、外宮の直会院を構成する五丈殿二字（一殿と主神司殿）・九丈殿および近接する御輿宿の配置・形式についての考証である。外宮の直会院は、慶安3年（1650）にそれまで仮建であった「一殿」が幕府によって造営されたものの、他の殿舎は失われたままであった。また、その「一殿」についても由緒が定かでなく、直会院に属する殿舎であると主張する長官以下禰宜等と、別のものであると主張する下級の宮人の間で権利を争う状態であった⁶⁾。殿舎を再興しようとする動きはすでに寛文期にはみられ、寛文6年

* 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻
大学院生・修士(工学)

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Univ. of Tokyo, M. Eng.

(1666)には外宮から山田奉行所に対して五丈殿の再興を願い出ている⁷⁾。しかし、このときは再興を認められず、その後桂昌院の寄進を得たことで元禄4年(1691)に再興が実現する⁸⁾。

『直会院勘文』の成立の経緯については黒瀬益弘の序に次のように記される。

故一祢宜正三位満彦神主、生資朴実、頗有好古之志操、夫執印鑰來其間未幾繼絶興廢者不為不多矣、去辛酉之歲語權祢宜度会延経神主及余曰、古昔直会院之設為祭祀宴饗、而其所閑(注：闕カ)甚多矣、今也僅遺一字其他無知旧礎者、若夫温故興復之則不亦說乎、願輔此志而用力於此矣、於是與共草其概、不幸満彦神主病且卒矣、天假之年必奏請以修復之惜矣哉、人事纒索不及於此矣、延経悲其言之不遂取之、不綴終哀古記以弁証勒為勘文一章、方位制度且復明可謂勤矣、有後之遇殿舎興復者而見此一章、則不必無裨補焉

天和二年八月十一日

權祢宜正五位下兼大物忌父度会神主益弘

これによると、天和元年(1681)に当時外宮長官であった松木満彦が直会院の再興を志して出口延経と黒瀬益弘に協力を依頼したものであり、満彦の死によって計画は中絶したものの、その後も出口延経が作業を継続して天和2年(1682)に完成させたものであるという。出口延経(1657～1714)は出口延佳の第二子で外宮権禰宜を勤めており、考証学をもって知られる人物である。一方の黒瀬益弘(1641～1732)は外宮権禰宜・大物忌父を務めた人物で、出口延佳に学を受け、神宮に関する多くの著述を残している。

『太神宮造制或問』と『直会院勘文』に共通するのは、当面の課題に即応すべく、再興を意図したものに対象を限定して考証としてまとめられたものであるという点である。また、作成者の組み合わせの共通性も指摘できる。『太神宮造制或問』は大宮司家の河辺故長・小田成近と、外宮の祠官かつ学者でもある中西信慶という組合せであり、『直会院勘文』は外宮長官の度会満彦が外宮の祠官かつ学者でもある出口延経・黒瀬益弘に依頼したものであるという、それはともに、神宮の実務・運営の中枢に近いところで作成されたものであった。

『神境雑話』『神境紀談』

一方で、『太神宮造制或問』や『直会院勘文』とは異なり、考証自体に主眼を置いたものも現れるようになる。

『神境雑話』(延宝9年(1681)序)⁹⁾は延宝年間に度会範次、度会貞重、度会末住、度会兼恒、豊田令智の5名が、中西信慶を招いて神境や事跡の話聞き、それを書にまとめたもので、その『神境雑話』をもとにさらに河崎延貞を招いて再編集を依頼して完成したものが『神境紀談』(元禄13年(1700)序)¹⁰⁾である。この編集に関わった人物はいずれも外宮の祠官であるが、神宮運営の中枢にいた大宮司や長官・禰宜らの関与はみられない。

その内容は、「神境」について網羅的に項目を立てて記述するもので、地誌に類するものではあるが、各殿舎についても考証が行われる¹¹⁾。中西信慶は、先に『太神宮造制或問』において考証を行った人物であるが、当面の課題に即応すべく扱う対象を両宮の玉垣・荒垣に限定した『太神宮造制或問』とは異なり、『神境雑話』『神境紀談』では内宮・外宮の殿舎について網羅的に項目が立てられて、取

り上げられる。それぞれの凡例に「一、有其名無其所者、考其古迹而記之、如御門殿舎是也、庶幾復古代也」(『神境雑話』)、「一、凡宮廟如門垣殿舎之類、有古存今亡者、皆仍旧記之以俟完復」(『神境紀談』)と記されるように、殿舎の再興・復古が意識されなかったわけではない。しかし、特に殿舎について、失われたものの再興が意識されたことは確かであっても、『直会院勘文』などと比較するならば、それは具体性を帯びたものではなかったであろう。

一方で注目されるのは、『神境紀談』の凡例に「一、凡世間所蔵之神境雑話者即是書之草稿也、編纂未就為好事者所写去遂致広于世、自今而後棄彼雑話用是紀談可」と記されることである。当時「世間」に『神境雑話』が写本で広まっており、『神境紀談』はそれに置き換わるものとして流布することが編纂段階から想定されていたのである。すなわち、『神境紀談』の編纂においては、古制に復すという理想は含まれているが具体性を帯びたものではなく、考証内容それ自体を成果とする方向へと主眼が移っているものといえよう。

『皇太神宮殿舎考証』『豊受皇太神宮殿舎考証』

網羅的な項目立てと世間への流布という性質は、『皇太神宮殿舎考証』『豊受皇太神宮殿舎考証』(以下まとめて『殿舎考証』とする)にもあてはまる。作者は『直会院勘文』の作者の一人である出口延経で、成立時期については、本文中で元禄5年(1692)の外宮斎王候殿再興に言及されることと、宝永5年(1708)の版本があることから、元禄5年(1692)～宝永5年(1708)の間とされる。『殿舎考証』はその名の通り、殿舎についての考証に特化したもので、冒頭に内宮・外宮それぞれの殿舎の配置図および鳥瞰図を載せ(図1～4)、本文では建物毎に項目を立てて古記録を引用し、延経の意見を按文で挿入するという構成をとる。按文の中で現状の丈尺について触れられることに現状が古制と異なることを指摘しようとする意図が窺われる点を除くと、本文はほぼ過去の姿についての考証に徹するよう見える。

ただし、図に関しても、両宮の子良宿館がそれぞれ一棟の建物として描かれるのは明らかに近世当時の状況を描くものであり、鳥瞰図における鯉木の数についても意図的に近世の状況を選択して描いているものと考えられるなど¹²⁾、純粹に復元に徹したものとは認められない。選択的に近世の状況を重ね合わせて作られた伊勢神宮の理想像というべきであろう。

なお、宝永5年に版行されたというのは、『殿舎考証』の図版部分のみであったが、その版元には江戸・京都・大坂の書肆が名を連ねており、伊勢以外にもその考証の成果が流布していったことが知られる¹³⁾。

本文自体は版行されなかったようであるが、『殿舎考証』はかなり流布したようで、後々まで参照されている。例えば、伊勢山田の御師の家に生まれた石崎文雅の随筆『郷談』(安永8年(1779))では、内宮の東西宝殿の位置が正殿の後方左右であったという説が松木卓彦の説として記されるが、続けて卓彦の言葉として「殿舎考証ニモ此事ヲ言ハザリキ」という記述がみられる¹⁴⁾。それは、卓彦や文雅にとって『殿舎考証』が殿舎の古制に関する知識のベースとして認識されていたことを端的に示すものといえよう。そのことは、石崎文雅による『止由気宮儀式帳』の注釈書『外宮儀式帳私考』(寛政11年(1799)成業)¹⁵⁾の殿舎に関する部分で「考証曰」「延経曰」

図1 『皇太神宮殿舎考証』内宮配置図

図2 『豊受皇太神宮殿舎考証』外宮配置図

図3 『皇太神宮殿舎考証』内宮鳥瞰図

図4 『豊受皇太神宮殿舎考証』外宮鳥瞰図

出典：福山敏男『伊勢神宮の建築と歴史』

といった記述が多くみられることから裏付けられる。なお、『編修地誌備用典籍解題』では『殿舎考証』について「殿舎の事実において遺憾なしといふべし」と評価する¹⁶⁾。

『内宮殿舎旧考』『両大神宮宮中古絵図殿舎考証』

『殿舎考証』に関連して、『内宮殿舎旧考』¹⁷⁾・『両大神宮宮中古絵図殿舎考証』¹⁸⁾にも簡単に触れておきたい。この二つの考証については、成立年代も作者も明らかにはされていない。『内宮殿舎旧考』は鳥瞰図を含まないことを除けば『皇太神宮殿舎考証』とほぼ同様

の構成で、内宮の殿舎の配置図と考証からなる。その配置図や考証の内容においては多少の異同はあるものの、全体の内容・構成の類似から『殿舎考証』と全く無関係に成立したものではないことは確かである¹⁹⁾。さらに、斎内親王川原殿院の車宿殿の解釈における差異など²⁰⁾、『内宮殿舎旧考』に比べて『殿舎考証』のほうが多少進んでいるとみられることから、『内宮殿舎旧考』は『皇太神宮殿舎考証』の作成段階のある時点において作られた草稿と推測される。

また、黒瀬益弘写とされる『両大神宮宮中古絵図殿舎考証』は、冒頭に両宮の殿舎の配置図が示され、建物名および現状寸法が記さ

れたもので（廃絶したものは「今亡」と記される）、考証自体は含まれない。内宮の配置図は『内宮殿舎旧考』のものと一致するので、『内宮殿舎旧考』とおそらくはそれに対応する外宮の殿舎に関する考証から配置図と現状寸法のみを抄出したのが『両大神宮宮中古絵図殿舎考証』であると考えられる。

『殿舎考証』が広く流布した一方、『内宮殿舎旧考』や『両大神宮宮中古絵図殿舎考証』はほとんど流布しなかったようで、『国書総目録』に載せられる写本は両者とも一本のみであるが、蘭田守良の『神宮典略』（文化末～天保初年）においては、内宮の殿舎に関して『内宮殿舎旧考』が多く参照されている²¹⁾。

以上のように、『太神宮造制或問』や『直会院勘文』といった当面の課題に即応する形で行われた考証から少し遅れて、『神境紀談』や『殿舎考証』のように両宮の殿舎を網羅的に扱う考証が現れてくる。それらは、考証自体を成果としたものであった。そして、『神境紀談』や『殿舎考証』において、両宮の殿舎の古制についての考証が一通り網羅されると、『郷談』の例にみるように、以後その内容に修整を加えられつつ更新されていく。『神境紀談』や『殿舎考証』は、そのための基盤として機能していったのである²²⁾。

なお、17世紀後半から18世紀初頭における伊勢神宮の殿舎の古制についての考証をまとめたのは、出口延経・中西信慶・黒瀬益弘といったように、専ら出口延佳門下の外宮祠官であって、内宮祠官による考証で17世紀に遡るものは管見の限りでは見出せない。少なくとも、後の時代の考証や注釈書等において参照・言及されるものに限れば、蘭田守夏『神拝次第秘抄』（正徳5年（1715）序）が最も早い時期のものである。

3. 両宮間の争論と考証

ところで、『神道大辞典』の「殿舎考証」の項では、「但し本書は外宮の殿舎を以て内宮のそれに対して規模丈尺等を優位ならしめんと意図の許に著述せられたものであるとの奥書のある写本もあるから、此点にも考慮すべきであらう」という記述がみられる²³⁾。この記述が具体的にどの写本をさしているかは不明であるが、出口延経の『殿舎考証』に対する内宮側の警戒感、内宮の文庫である林崎文庫の蔵書印を有するいくつかの写本に次のように記されていることから理解される²⁴⁾。

殿舎考証ハ山田之住人出口愚大夫延佳男権大夫延経輯之、但細かに考たれ共神宮伝来の説にあらざる事共相まされり、且引用の書之内にも執用かたきも見えたり、吾党等覚悟のため求置といへとも其心得可有之

経林
守和
氏時

この奥書を記した中川経林、井面守和、藤波氏時の三名はいずれも18世紀前～中期の内宮の禰宜である²⁵⁾。ここでは『殿舎考証』について、その詳細さは評価しつつも、一方で誤りもあるとして注意を喚起している。

それでは、何故このように内宮の祠官らが外宮の祠官である出口延経の『殿舎考証』に対して警戒感を示したのであろうか。その背景として注目されるのは、殿舎等の再興をめぐる内宮と外宮の間

でなされた争論である。

寛文11年（1671）に幕府から両宮および作所・会合へ出された「寛文遷宮御条目」には、「一、伊勢内宮御遷宮御造營之諸色、長官神主并作所遂吟味、諸役人・京都之役人迄、守古法、不企新義様、堅可申付之事」という一条がある²⁶⁾。古法を守り新儀を企てない、という点については、両宮の祠官らも共通してその重要性を指摘するところである²⁷⁾。しかし、新儀ではないかたちでの改変として復古・再興というものを考慮に入れるならば、そこにさまざまな解釈の余地が生じることになる。

特にそれらが問題になるのは、それらが両宮間の格差に関わるためであった。永仁年間の「皇」字をめぐる争論（外宮が「豊受皇太神宮」と記したのに対して内宮が異議を唱えたもの）や、天正13年（1585）の式年遷宮における日程の前後をめぐる争論などが知られるように、内宮と外宮の間では中世以来しばしば争論が行われた。それらの多くにあらわれるのは、両宮を対等なものとして位置付けようとして格差解消を目指す外宮と、それに抵抗する内宮という構図である。そして17世紀後半、殿舎の再興・復古が度々なされた時期においては、それらもまた争論の種となっていた。

寛文3年（1663）における両宮摂社の再興においても、各摂社の正殿の規模をめぐる格差の有無が問われる構図がみられたが²⁸⁾、殿舎の再興・復古の可否が争論として具体化したのは、元禄2年（1689）の式年遷宮を控えた貞享5年（1688）頃であった。

近世においては、式年遷宮の度に殿舎の再興・修復などを願い出ることが慣例化しており²⁹⁾、外宮は元禄度の遷宮に際して黄金の御樋代（神体を納める容器）の再興を願い出た。黄金の御樋代もまた、当時内宮では遷宮の度に造進されていたが、外宮では永禄6年（1563）以来造進されておらず、寛文度にも再興を願い出たものの認められずにいた。しかし、その再興願に対して内宮側は、再興ではなく新儀であるとして異議を唱え、さらに遡って寛文9年（1669）の式年遷宮に際して玉串御門（現在の内玉垣御門）・第四御門（現在の外玉垣御門）の千木と鰹木を再興したことも新儀であったと非難を加えたのである³⁰⁾。

貞享5年（1688）5月28日、内宮の神主等が山田奉行所に参上して述べた外宮の黄金の御樋代再興への反対意見の中では、

外宮ニハ毎度新規を企被申候、寛文年中玉串御門・第四御門ニ始而、千木・鰹木・御金物等を被致候、ヶ様ニ御座候而ハ、以後如何様成儀可有之も無心元奉存候³¹⁾

と主張し、同日内宮神宮中から山田奉行岡部勝重の家臣皆川勘助宛に差し出した口上書では

一、就来年御造替遷宮外宮神宮中より御樋代之黄金之義、御訴訟被遊之由承及候、件之御樋代之義ハ、重て子細御座候処ニ、新義違例之所望難得其意奉存候、惣而寛文御遷宮以来、諸事被企新規候事、両宮差別も無之罷成以来者何様之義を可被巧出も不存知候而、難義仕御事ニ候³²⁾

と記される。すなわち、外宮においては「抑 神幸之儀法興廃復正者、無善於寛文九年之例」³³⁾と誇らしげに語られる寛文度の式年遷宮であるが、内宮の見解は異なっていたのである。

寛文度の式年遷宮で再興された玉串御門・第四御門の千木・鰹木については、外宮側でも内宮との相違を意識しており、次のような記述を見出せる。

●出口延佳『太神宮神道或問』（寛文6年（1666）刊）^{34）}

問曰、玉串御門・第四御門に、内宮は千木・鯉魚木有て外宮になきは、外宮は内宮より宮も小ましませば、をとり給たる故にや。答曰、さにはあらず、是は神官と大小工等の懈怠にて、古記を考ざる故なり。（中略）繁榮の時の記録には、外宮の御下に、第四御門の千木・鯉魚木の寸尺まで慥に相見侍なり。例せば玉串御門にも有べき也。

●松本継彦『継彦神主日次』寛文9年3月9日条^{35）}

玉串御門之千木堅木今度改金物打之、内宮ト同前、但戸平ナシ、以来勘之

『太神宮神道或問』の間では、玉串御門・第四御門の千木・鯉魚木が内宮・外宮の格式差を示すものでと認識されており、内宮にあって外宮にないことが問題として捉えられている。『継彦神主日次』の記述からも、内宮との異同が問題になっていることがわかる。

また、後者では内宮との異同として扉の有無にも言及していることも注目される。というのは、この扉についても外宮は宝永度式年遷宮に際して再興を願い出ており、内宮との争論の種となっているのである。

黄金の御樋代の再興は元禄度の遷宮の際には認められず、宝永度式年遷宮に際して外宮は再び願い出た。そして、同じく外宮から再興を願い出た玉串御門の扉と併せて、それらが新儀か再興かという点をめぐって、山田奉行所において両宮間の対論が行われた。その結果、宝永度には黄金の御樋代の再興が認められ、玉串御門の扉については今度の再興は控えることになったものの、内宮から再興について異論がない旨を次のような書付をもって差し出させるに至った^{36）}。

外宮玉串御門御戸平願之儀無之旨申上候処、古例有之候記録外宮ニ御座候、内宮ニ者外宮玉串御門御戸平無之筈之記録無御座候、数年無御座致露顕候迄ニ而申上候、然上者願之通被仰付候而異儀無御座候、以上

七月十四日

神主中
内宮長官印

そして、延享4年（1749）の式年遷宮の際に玉串御門の扉の再興は実現する^{37）}。

前節で見てきた考証は、おおよそこのような争論が行われている時期に外宮の祠官によって作成されたのであるから、当然のことながら外宮側の主張が反映されている。

外宮玉串御門・第四御門の扉や千木・鯉魚木について、『神境雑話』には特に触れられないものの、『神境紀談』では外宮の第四御門の項で「又此御門ニモ御扉有シ事頭工日記、応永送官符ニ見エタリ、（中略）、千木鯉魚木モ絶エタリシヲ寛文遷宮ノ時再興アリテ古ヘニ復リ」として「頭工日記」と「応永送官符」を引用し、玉串御門の項では「此御垣又ハ御門ノ千木鯉魚木ナトモ絶エタリシヲ寛文遷宮ノ時再興アリテ古ヘニ復レリ、此御門ニモ扉ノ有リシヲ寛永遷宮以後ニ如何ナル故ニカ取除カレシニ、寛文ノ遷宮ノ時ニモ尚改メ復ヘサレス」と指摘する^{38）}。『殿舎考証』では、玉串御門の項で「此門及第四門近世無千木鯉魚木、亦無門扉、寛文造宮再興千木鯉魚木」と記して「頭工日記」から「御門鐐」の寸法を引用し、第四御門の項では「頭工日記」から千木・鯉魚木と扉の寸法、「応永送官符」から「御門鐐釘覆金伍枚」という箇所を引用する。

宝永6年（1709）7月12日に外宮から差出した玉串御門の扉の再興願には「此御扉古へより有之段ハ頭工日記と申旧記に相見申候」と記されており、このように記録を提示できたことが再興を認められることにつながったものと考えられよう。

「新儀」か「再興」かという点をめぐってなされた争論は、内宮側も自身で殿舎について考証を行う必要性を強く感じさせたものではなかろうか。『殿舎考証』に対して注意を促す一方で、蘭田守夏の『神拝次第秘抄』（正徳5年（1715）序）のように、内宮祠官による考証が作られるようになるのは、そのような背景によったものと考えられる。

4. おわりに

以上から、本論の考察内容をまとめておきたい。

寛文期から記録として残されるようになった伊勢神宮の殿舎の古制に関する考証は、最初は具体的な再興を目的として当面の課題に即応するものであったが、その後、体系的で考証自体が成果となるものが現れるようになる。前者は限定された対象と神宮運営の中心人物（大官司や長官）の関与に特徴付けられ、後者は網羅的な項目立てや、その成果の「世間」への流布によって特徴付けられる。

なお、17世紀後半から18世紀初頭にかけて、このような考証を行ったのは、専ら外宮の祠官であった。外宮はこれらの考証を背景に、殿舎等の復古・再興を進めていこうとするが、それらは、外宮と内宮の格差の解消を意味するものでもあった。そのため、元禄度式年遷宮の準備する頃から、内宮側はそのことに対して反対する姿勢をとるようになる。そのような中で、外宮の祠官による古制に関する考証は、殿舎等の再興を目指す外宮側の主張を正当化するための役割も帯びていたものと考えられる。

寛文期をピークとした殿舎等の再興の動きは18世紀に入ると下火になり、延享4年（1749）以降は幕末・明治期までほとんどみられなくなる。一方で、殿舎の古制を明らかにしようとする考証は、『神境紀談』や『殿舎考証』における成果をベースとして、両宮の祠官やその他の学者たちによって儀式帳の注釈書などの形で進められていき、幕末・明治期の復古・再興の動きを準備していくことになるのである。

注

注1) 福山敏男は「江戸中期から、儀式帳によって神宮の殿舎の復元図を作る試みが重ねられた」と指摘し（『神宮の建築とその歴史』、『神宮 第六十回神宮式年遷宮』所収、小学館、1975年）、中西正幸では「古姿を求める考証」が寛文期にはじまると指摘される（『神宮式年遷宮の歴史と祭儀』、大明堂、1995年）。

注2) 『神宮建築に関する史的調査』、造神宮使庁、1940年。福山敏男『伊勢神宮の建築と歴史』（日本資料刊行会、1976年）として復刻。

注3) 加藤悠希「17世紀中期の伊勢神宮殿舎再興における儀式帳の役割について」（『日本建築学会計画系論文集』624号、2008年2月）

注4) 加藤悠希「伊勢神宮の寛文度玉垣再興と『太神宮造制或問』」（『2008年度日本建築学会年次大会（九州）学術講演梗概集』）

注5) 国立公文書館所蔵142-843を使用した。

注6) 中西正幸「黒瀬益弘と神宮祭祀」（『皇学館大学神道研究所紀要』15輯、1999年3月）および福山敏男『伊勢神宮の建築と歴史』参照。この「一殿」について福山敏男は式年遷宮退転以前の「一殿」とは異なる「宮人の殿」であると推定している。

注7) 『継彦日次』（国立公文書館所蔵、142-654）

注8) なお、「一殿」が直会院のどの建物に相当するかについては、解釈の変遷がみられる。福山敏男によると、天正の「檜垣兵庫神事記」九月十六日条に「九條（丈）殿之一字殿ニテアリ、今ハ一殿ト名付ル」とあるという（『伊勢神宮の建築と歴史』325 頁）。すなわちここでは「一殿」は九条殿に相当する建物と解釈されていることになる。しかし、寛文 6 年（1666）の願書では「五丈殿二間」について割注で「一殿者慶安年中御造営、一殿者中絶」と説明して中絶した一字の再興を願い出ており、「一殿」は五丈殿二字のうちの一字であるという解釈を示す。また、その後、『直会院勘文』や、黒瀬益弘編の『寛文九年外宮正遷宮記』などでは「一殿」を九丈殿のことと解釈しており（後者は割注で「今称一殿者古九丈殿也」と記される。『神宮遷宮記』第 5 巻、289 頁）、元禄 4 年（1691）に五丈殿が再興された後は「九丈殿」と呼ばれることになる。

注9) 『神境雑話及附録』（東京大学総合図書館所蔵）を使用した。

注10) 大神宮叢書『神宮随筆大成 後編』（神宮司庁、1942 年）所収。

注11) 凡例には「凡是編一主両宮、而自門垣殿舎別宮拱社以至山川木石辺方小地、所繫神境者都無不載焉」と記される。

注12) 内宮宝殿について『儀式帳』には「伏堅魚木各八枚」と記されるが、本文中では『儀式帳』から殿舎の規模のみ引用し、鳥瞰図では堅魚木が六本しか描かれない。また、内宮西殿の倉は『儀式帳』には「二字」とあるが、図では由貴殿一字しか描かれない。ただし、平面規模は、必ずしも厳密なものではないものの、近世の規模（6 尺×4 尺 1 寸）ではなく儀式帳の規模（1 丈 8 尺×1 丈 5 尺）で描かれているように見える。また、内宮の祢宜斎館を図示するにあたって「延暦時祢宜斎館」と記するのは、この図で描かれる殿舎の配置が特定の時代に収束されるものでないことを示すものといえよう。なお、旧跡が不明であるために描かれなかった建物もある。

注13) 下中彌三郎編『神道大辞典』（平凡社、1937 年。縮刷復刻版、臨川書店、1990 年）の「殿舎考証」の項では、「写本中この両図が木版摺になつてゐるものもあるが、本書は刊行さるるには至らなかつた様である。」と記されるが、『国書総目録』によると、『殿舎考証』の宝永 5 年刊の版本として神宮文庫と内閣文庫所蔵のもの各一本（国立公文書館蔵は『内外宮殿舎図』と題したもの）が挙げられる。それらはともに『殿舎考証』のうち、両宮の図版のみを抜粋して 1 冊にまとめたものである。

なお、版元には江戸日本橋の須原茂兵衛、大坂上久宝寺町の西澤九左衛門、京寺町松原通の今井七郎兵衛と、三都の書肆が名を連ねるが、岡本勝によれば、この三名は宇治山田の書肆である講古堂藤原長兵衛の三都における売広め店であろうと推定されている。また、この藤原長兵衛・須原茂兵衛・西澤九左衛門・今井七郎兵衛が版元として名を連ねる宝永 4 年（1707）刊の『伊勢参宮按内記』の後に付された記録では、藤原長兵衛が刊行した本（13 部のうち 7 部は出口延佳の、3 部は出口延経の著作である）を挙げ、「殿舎考証 追付板行仕候」と記されているという（岡本勝「近世三重の出版」、朝倉治彦・大和博幸編『近世地方出版の研究』所収、東京堂出版、1993 年）。

注14) 『神宮随筆大成 後編』615 頁。

注15) 『神祇全書』第 3 輯所収（思文閣、1971 年）。

注16) 『大日本近世史料 編修地誌備用典籍解題 二』（東京大学出版会、1973 年）318 頁。

注17) 神宮文庫所蔵、一門 1305。

注18) 神宮文庫所蔵、一門 6267。『神宮文庫所蔵和書総目録』（戎光祥出版、2005 年）には「黒瀬益弘写（外宮子良館旧蔵本）」と記される。「外子良館」という蔵書印は確認できるが、奥書などはみられない。

注19) 『内宮殿舎旧考』の配置図は、直会殿院・御酒殿院周辺が『殿舎考証』のものと異なっており、『殿舎考証』の図に描かれる車宿が『内宮殿舎旧考』の図には描かれていない。なお、『内宮殿舎旧考』に描かれる直会殿院・御酒殿院周辺については福山敏男『伊勢神宮の建築と歴史』の第 51 図「江戸時代諸家の皇大神宮直会殿院推定図」に載せられる諸図とも一致しない。

注20) 「神宮雑事記」に「御輿宿院中」とあるのに対し『内宮殿舎旧考』では「按御輿宿院者謂河原殿院中有御輿宿歟」とするのを『殿舎考証』は「按御輿宿謂之院者以在河原殿院中也」とする。

注21) 大神宮叢書『神宮典略 前篇』（臨川書店、1971 年。初版は神宮司庁、1932 年）。

注22) 近世後期の主な考証や注釈書における、それ以前の考証の参照・言及

の様相について簡単に整理しておく、中川経雅（1742～1805、内宮祠官）による『太神宮儀式帳頭註』（安永 2 年（1773））や『太神宮儀式解』（安永 2～4 年（1773～75））の殿舎に関する部分では近世の文献への言及がほとんどみられず、蘭田守良（1785～1840、内宮祠官）による『神宮典略』（文化～天保）の殿舎に関する部分では、内宮の殿舎に関しては『内宮殿舎旧考』と『太神宮儀式解』が、外宮の殿舎に関しては『神境紀談』が多く参照される。石崎文雅（1723～1799）の『外宮儀式帳私考』では『殿舎考証』や延経の説が多く参照される。また、京都の学者、藤原貞幹（1732～1797）による『伊勢両太神宮儀式帳考註』（天明元年（1781）自序）で言及されるは『殿舎考証』のみである。橋村正兌（1785～1837、外宮祠官）による『外宮儀式解』（文化 12～13 年（1815～16）、未完）では『殿舎考証』もしくは延経の説と『伊勢両太神宮儀式帳考註』への言及が多くみられるが、後者についてはその説を否定するために言及していることが多い。

注23) 下中彌三郎編『神道大辞典』（平凡社、1937 年。縮刷復刻版、臨川書店、1990 年）

注24) 神宮文庫所蔵、一門 1293、一門 1296。ともに 2 冊からなり、前者は両巻の巻頭、後者は下巻の巻末に書入れられている。

注25) 大神宮叢書『二宮禰宜年表』（臨川書店、1970 年）によれば、中川経林は宝暦 12 年（1762）に 64 歳で没、井面守和は安永 2 年（1773）に 69 歳で没、藤波氏は宝暦 2 年（1752）に 40 歳で没している。

注26) 『神宮遷宮記』第 5 巻（神宮式年造営庁、1995 年）5 頁。引用は内宮宛のもの。

注27) 伴五十嗣郎「近世神宮祠官の遷宮観」（『伊勢神宮式年遷宮の総合的研究』所収、平成 8 年度～平成 10 年度科学研究費補助金〔基盤研究（B）（2）〕研究成果報告書 研究代表者 伴五十嗣郎、1999 年）

注28) 注 3）前掲論文参照。

注29) 近世の式年造替については、「式年はむしろ新規造営の機会として捉えられ、復古を実現する契機とみなされることとなった」とする清水重敦の指摘がある。清水重敦「建築における過去 日本近世～近代における継承と転換の位相」（鈴木博之他編『シリーズ 都市・建築・歴史 7 近代とは何か』東京大学出版会、2005 年）。

注30) なお、寛文式年遷宮に関する史料（遷宮記および『継彦神主日次』『継彦日次』『氏富記』『氏富卿日記』等）を見ても、寛文 9 年当時に内宮が外宮の玉串御門・第四御門の千木・鯉木の再興を批判した事実は確認できない。

注31) 『元禄二年内宮遷宮之覚』（『神宮遷宮記』第 5 巻所収）、612 頁。

注32) 『元禄二年内宮遷宮之覚』（『神宮遷宮記』第 5 巻所収）、612～613 頁。皆川勘助が山田奉行岡部勝重の家臣であることについては、『元禄二年内宮遷宮記』（同前）819 頁に記載がある。

注33) 元禄 2 年（1689）6 月 11 日付の外宮庁宣案（『元禄二年内宮遷宮記』、『神宮遷宮記』第 5 巻所収、719 頁）。なお、このような表現は以後慣用化し、例えば寛政元年（1789）6 月 10 日付の外宮庁宣においても「抑 神幸之杖儀継絶復正者、則無善於寛文遷宮矣、元禄以来専用彼例、（以下略）」という記述がみられる（『寛政元年外宮遷宮記』、『神宮遷宮記』第 6 巻所収、660 頁）。

注34) 『神道大系 論説編七 伊勢神道（下）』（神道大系編纂会、1982 年）47 頁。

注35) 国立公文書館所蔵、142-654。松木継彦は当時外宮の九祢宜。

注36) 『宝永外宮正遷宮記』（国立公文書館所蔵、142-508）。黄金の御桶代再興の経緯については大西源一『大神宮史要』（平凡社、1960 年）664～672 頁参照。このときの争論においては、河崎延貞が『宝永十条』を著して外宮と内宮が対等であることを論じた。また、それに対する反論としては井面守和による『神路記』がある。

注37) 近世には、殿舎等の再興は、造営料の余りをもってするということが慣例化していたようで、余りが生じた延享度に再興が認められたのである。なお、延享度には、内宮の鳥居三基も再興された。

注38) 『神道随筆大成 後篇』234、237 頁。『神境雑話』に記されず『神境紀談』において記されるのは、全体的に『神境紀談』のほうが記述が詳細であることは確かであるものの、両宮間の争論が貞享頃から顕在化してきたことを背景としたものとも考えられる。

（2009 年 2 月 10 日原稿受理、2009 年 4 月 7 日採用決定）